

テレビ情報誌の誕生と発展

——テレビ番組表とは何か——

平 松 恵一郎

1. はじめに

テレビ情報誌とは、一般的にテレビ番組表を掲載し、おすすめ番組等を紹介する雑誌のことを指す。その発行サイクルによって週刊誌（＝1週間分）、隔週刊誌（＝2週間分）、月刊誌（＝1か月分）と掲載される番組表の期間が異なっている。現在、国内で書店流通されている番組表付きのテレビ情報誌¹⁾は14誌ある（表1）。このほかにも直販のみの雑誌や、ケーブルテレビ情報誌、さらにテレビ情報誌ではないがテレビ番組表を掲載している雑誌など

表1 番組表掲載テレビ情報誌一覧（書店流通誌のみ、2020年9月現在）

	雑誌名	発行形態	創刊年	出版社
1	TVガイド	週刊	1962年8月	東京ニュース通信社
2	ザテレビジョン	週刊	1982年9月	KADOKAWA
3	NHK ウィークリー ステラ	週刊	1960年5月	NHK サービスセンター
4	TV LIFE	隔週刊	1983年3月	ワン・パブリッシング
5	TV station	隔週刊	1987年9月	ダイヤモンド社
6	月刊ザテレビジョン	月刊	1995年3月	KADOKAWA
7	デジタルTVガイド	月刊	2001年5月	東京ニュース通信社
8	月刊TVnavi	月刊	2003年3月	産経新聞出版
9	月刊TVfan	月刊	2007年4月	メディアボーイ
10	おとなのデジタルTVナビ	月刊	2009年11月	産経新聞出版
11	月刊TVガイド	月刊	2011年1月	東京ニュース通信社
12	月刊スカパー！	月刊	1998年6月	びあ
13	スカパー！TVガイドプレミアム	月刊	1998年6月	東京ニュース通信社
14	スカパー！TVガイドBS+CS	月刊	2002年6月	東京ニュース通信社

（日本雑誌協会（2019）、メディア・リサーチ・センター（2019）を参照して筆者作成）

が存在する。地上波の場合、地域によって放送局も放送内容も異なるため、全国展開するためには各地区版を作らなくてはならず、非常に手間のかかる雑誌といえる。

2011（平成 23）年 7 月に地上波のテレビ放送はデジタル化され、番組表はテレビ画面でも見るができるようになった。しかしながら、今もこれだけの数のテレビ情報誌が存在し、また新聞のテレビ欄も健在である。このテレビ情報誌の根幹をなす番組表というものがいつ誕生し現在に至るのか、その歴史をたどりながら考察してみたい。

2. テレビ情報誌および番組表に関する先行研究

テレビ情報誌および番組表に関する先行研究は少ない。アメリカでは『TV GUIDE』を研究した Glenn C. Altschuler と David I. Grossvogel の共著による『*Changing Channels: America in TV Guide*』（1992）が発行されているが、この書籍は TV GUIDE の創刊から 1990 年代までの変遷と、『TV GUIDE』における人種問題や女性問題等を分析したもので、番組表そのものというよりは『TV GUIDE』が扱ってきた誌面内容の分析と言える。

日本では、李（2017）が「放送情報と視聴経験を記録してきたテレビ情報誌は、「テレビ情報文化」の分析に利用できる可能性がある。しかし日本において、テレビ情報誌に関する先行研究は、管見の限りでは存在しない。」²⁾とし、番組視聴についての先行研究と前述したアメリカの先行研究を考察している。また、李（2018）は『週刊 TV ガイド』を題材に、女性の視聴行動の変容を分析している。この論考もテレビ情報誌が扱う誌面から見た視聴行動の分析であり、いわゆる番組表に言及したものではない。

番組表に関する研究としては、服部（1992）が新聞のラジオ・テレビ欄の歴史と影響について考察し、服部（1993）は民放誕生後のその変遷を追っている。また、三矢、重森（1998）による「新聞のテレビ欄はどう読まれているか」という調査報告がある。これは個人面接法とグループインタビューにより、新聞のテレビ欄の利用状況を調査したもので、「ある局に対して描いているイメージとテレビ欄表記には密接なつながりがあるようである。」³⁾としている。視聴者が持つテレビ局それぞれのイメージと、テレビ欄の表記の仕方の関係を示唆したもので、非常に興味深い調査である。この調査によって「テレビ欄の活用が視聴者拡大の有効な手段であること」⁴⁾を明らかにしている。宮川（2016）は、「放送草創期の番組表を読み解く（1）」において、NHK 放送文化研究所に保存されている『NHK 確定番組』という新聞の番組表の元となる放送内容を記録した小冊子から、ラジオ放送草創期の番組内容について言及している。必ずしも放送された内容を忠実に反映した資料ではないとしながらも、「研究の基礎資料が非常に少ない大正末から昭和初期にかけての放送草創期において、この『NHK 確定番組』が放送史研究の重要な資料であることに違いはない。」⁵⁾としている。同じく宮川（2017）では「放送草創期の番組表を読み解く（2）」で、さらに『NHK 確定番

テレビ情報誌の誕生と発展

また、JOAKで働く人を取り上げたコーナーや、「きょうの放送歌詞」という放送予定の童謡の歌詞を載せたコーナー、ラジオ受信機の仕組みについて解説した「ラヂオ入門」といった読み物記事と、その日の番組表が掲載されている。番組表は横書きでJOAK（東京）とJOBK（大阪）を掲載している。次頁には「紙上放送」と題して演劇台本の掲載や、ラジオに関する読者投稿欄、放送局に対しての質問等を受け付ける「ラヂオ問答」など、ラジオに関するありとあらゆる記事が掲載されている。下段の広告も、ラジオ関係の書籍広告や、ラジオ受信機の広告で埋められ、編集、広告一体となってこの「ラヂオ版」に取り組んでいる

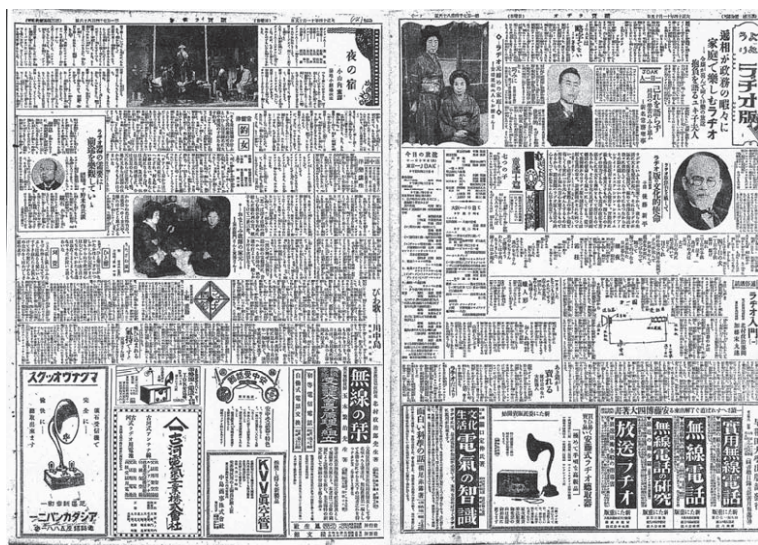


図3 1925（大正14）年11月15日付、読売新聞（pp.13-14）

様子が見てとれる。

対する朝日新聞は、放送開始のころとあまり変化のない縦書きの番組案内が続くが、1947（昭和22）年6月16日付で、ようやく現在の形に近い横書きの番組表に変更した。（図4）

1951（昭和26）年になると、9月1日に名古屋で中部日本放送、大阪で毎日放送が開局し、民間放送の時代が始まった。東京では12月25日にラジオ東京（現・TBSラジオ）が開局、番組表もNHKとラジオ東京が2段で掲載されるようになる。1952（昭和27）年3月31日に日本文化放送（現・文化放送）、1954（昭和29）年7月15日にニッポン放送がそれぞれ開局、放送局数も増え、番組表も現在のテレビ欄並みのスペースを取るようになっていった。

4. テレビ番組表の誕生

1953（昭和28）年2月1日、NHK東京テレビジョンがテレビ放送を開始した。2月1日

ラジオ・16日	
5・45	経済の発展地図 田口俊一
6・45	時局について 諸松佐次郎
7・15	対談「開局の経緯」 田口俊一・田口俊一
10・00	音楽の旅「音楽の発展地図」 田口俊一
10・30	結核菌の体から 田口俊一
11・00	物理「プランクリン」 田口俊一
0・45	演説「古きを捨てて」 田口俊一
1・00	新内閣の役割、個性主義、物産
3・30	学習指導「歴史科」 田口俊一
4・15	演説「文藝復興」 田口俊一
5・30	演説「街を歩いて」 田口俊一
6・30	ゲームの指導 高橋四郎
7・30	演説「あしきよきあい」
8・00	演説「夕、路、平野力三、煙
9・30	科学の目 田口俊一、コントラ
・パスの部	小うた集 三浦あけ子
6・30	インプレと見聞 田口俊一
6・30	世界の顔々「デンマーク」
7・30	演説「音楽の発展地図」 田口俊一
8・00	演説「音楽の発展地図」 田口俊一
9・00	演説「音楽の発展地図」 田口俊一
3・00	ピアノ・ダイナ・リンとD・
シヨア	6・30 歌 メランナ・ミ
ラーとエテ	イ・デュラン 6・15
シヨ	・スタブオー ドとハターフイ
ース	6・30 「二十世紀」 ミミ・ベン
ツェル	8・00 演説「音楽の発展地図」
・トレヴァ	9・00 ジヤネット・フ
レーア	・アラン・ジョーンズ

図4 1947（昭和22）年6月16日付，朝日新聞（p.2）

当日の朝日新聞の番組表を見ると、「ラジオプログラム」というタイトルで、左からラジオ東京、NHK ㊦一、NHK ㊦二、日本文化（放送）のラジオ番組表が、朝6時台から夜11時台まで62行を使って、ちょうど現在のテレビ番組表に近い形で掲載されている。その下に、NHK テレビとして、縦書きで14行ほどの番組案内が、まさに1925（大正14）年にラジオが開局した当時と同じような形で掲載されている（図5）。番組表によれば、午後2時に放送開始、「開局に当たり」という古垣鉄郎（会長）の挨拶に始まり、最後の番組は午後8時45分の「受信者の皆様へ」で終了しており、まだ番組表が必要なほどのプログラムはない。

同年8月28日には日本初の民放テレビである日本テレビ放送網が開局、テレビは2局体制となるが、朝日新聞の番組表は、やはりラジオ番組表の下でそれぞれ横書き6行の流し込みで、申し訳程度にしか掲載されていない。日本テレビと関係が深い読売新聞も、日本テレビの番組表に横書きで17行のスペースを使ってはいるが、やはりラジオ番組表がメインでスペースも大きく、朝6時台から夜11時台まで68行を使用していた。現在でも新聞の番組欄のことを「ラジオ・テレビ欄（ラ・テ欄）」と呼ぶが、これは、長年ラジオが主であった名残ということがわかる。

その後、1955（昭和30）年4月1日に現在のTBSテレビであるラジオ東京テレビ（KRテレビ）が開局、1959（昭和34）年2月1日に現在のテレビ朝日である日本教育テレビ（NETテレビ）が開局、同年3月1日にはフジテレビが開局し、在京のテレビ局はNHKと民放合わせて5局^{9）}となった。フジテレビが開局した1959（昭和34）年3月1日付朝日新

図5 1953（昭和28）年2月1日付，朝日新聞（p.5）

同年4月1日より読売新聞はテレビ欄を拡充する。前日の「社告」では、読売新聞が大正14年11月にラジオ・ページを創設したことに触れ、今度はテレビ欄拡充により「テレビの普及、発達に力を尽そうとするもの」¹⁰⁾としている。テレビ欄の拡充は誌面の1頁を使い、左上にテレビ番組表、右下にラジオ番組表を置き、ついにテレビの方がラジオより上部に掲載された。テレビ番組表は「テレビプロ」というタイトルで、左から最初に日本テレビ、

NHK テレビ, KR テレビがそれぞれ 57 行, フジテレビ, 日本教育テレビがそれぞれ 53 行を取り, 22 行のショートプログラムでNHK 教育テレビも掲載されている。ラジオ番組表は「ラジオプロ」というタイトルで左から, NHK オー, NHK オ二, ラジオ東京, 文化放送, ニッポン放送で, それぞれ 65 行, ショートプログラムとして日本短波 (現・ラジオ日経) とラジオ関東 (現・ラジオ日本) がそれぞれ 23 行, FEN (現・AFN) とNHK-FM がそれぞれ 11 行確保されている。番組表以外には, 放送にまつわるニュース (この日は日本テレビが計画しているニュース番組のワイド化について) と, テレビ・ラジオそれぞれのおすすめ番組紹介, 現在まで続く読者投稿欄「放送塔」, さらに囲碁の記事が掲載されている。その下段には連載小説と突き出し広告が掲載されており, エンターテインメント全般にかかわる文化面といった紙面になっている。(図 6)



図 6 1959 (昭和 34) 年 4 月 1 日付, 読売新聞 (p.5)

1961（昭和36）年4月1日からは朝日新聞もラ・テ欄のレイアウトを変更する。まず上段にテレビ番組表で、左からNHKテレビ、日本テレビ、東京テレビ、フジテレビ、NETテレビをそれぞれ58行で掲載、下段にはラジオ番組表で、左からNHK オール、NHK オ二、東京ラジオ、文化（放送）、ニッポン（放送）をそれぞれ56行で掲載した。ショートプログラムとして、上段右にはNHK 教育テレビ28行、FEN12行、NHK-FM13行、下段右にはラジオ関東と日本短波がそれぞれ28行ずつで掲載されている。このあたりから新聞のラ・テ欄は、完全にテレビがメインとなり始めている。1ページの10段を番組表と番組解説及び関連記事に使っており、当時のテレビやラジオに関する読者の関心の高さがわかる。（下5段には連載小説と広告が掲載されている）（図7）

図7 1961（昭和36）年4月1日付 朝日新聞（p.7）

一方、読売新聞は1963（昭和38）年11月24日付からテレビ版とラジオ版のページを2ページに分けた。テレビ番組表は左から日本テレビ、TBSテレビ、フジテレビ、NETテレビ、NHKテレビで、それぞれ69行で掲載し、さらに翌日の6時台から9時台までを11行で掲載、合計80行となった（NHK 教育テレビは46行のショートプログラム）。ラジオ番組表は別ページで、メインとなる番組表（NHK 第1、NHK 第2、TBS ラジオ、文化放送、ニッポン（放送））は65行+深夜（NHK は明朝）分として3行で合計68行、さらにショートプログラムでラジオ関東、日本短波、NHK-FM、FM 東海をそれぞれ22行、FEN を10

行で掲載している。(図8)

1964(昭和39)年12月12日、在京キー局最後となる東京12チャンネル(現・テレビ東京)が開局し、現在も続くNHK2チャンネル+民放5局の体制が生まれた。



図8 1963(昭和38)年8月20日付 読売新聞 (pp.10-11)

5. テレビ情報誌の誕生

日本で最初のテレビ情報誌は、国立国会図書館所蔵のものでは、旺文社から1960(昭和35)年に創刊された『週刊テレビ時代』とされている¹¹⁾。1962(昭和37)年、東京ニュース通信社から『週刊TVガイド』(現・『TVガイド』)が創刊され、同誌が現在まで続く雑誌としては一番歴史のあるテレビ情報誌である。同年8月10日付の朝日新聞に「テレビの週刊誌」という見出しの、週刊TVガイド創刊に関する小さなコラムが載っている¹²⁾。「夕方にもう朝刊は片付けられてないのに、テレビとラジオ欄のページだけは、一日中、いつでもちゃんと茶の間に置いてある。だからテレビの週刊誌だって必要なはずなのに、いままで、いつも失敗をくり返している。何故だったのだろうか。」とあるように、新聞におけるテレビ番組表が新聞読者に重用されていたこと、またテレビ情報誌が誕生しては消えていったことがわかる。

『週刊TVガイド』は、1961(昭和36)年に、のちに東京ニュース通信社の二代目社長となる奥山忠が、当時勤務していた朝日イブニングニュース社より米国出張を命ぜられ、現地で『TV GUIDE』の編集者と会い、その編集方針や販売方法に大いに刺激を受け、帰国後、東京ニュース通信社に入社し、父親である社長・奥山清平を説得して創刊した雑誌であ

テレビ情報誌の誕生と発展

る¹³⁾。創刊時の番組表は現在のような表組ではなく、アメリカの『TV GUIDE』と同様の形である放送開始時刻順で横組みであった（図9）。雑誌のサイズはA5判で、『TV GUIDE』よりはる大判ではあるが、コンパクトサイズの雑誌だ。このアメリカ式の横組み番組表は、1964（昭和39）年9月4日号まで続いた。ちなみに先に創刊した『週刊テレビ時代』の番組表も同様のアメリカ式のスタイルを取っていた。

アメリカの『TV GUIDE』は、トライアングル社の社長であるウォルター・アンネベル



図9 『週刊 TV ガイド』 創刊号表紙と創刊号番組表の一部

グが、ニューヨークの『TV ガイド』、フィラデルフィアの『TV ダイジェスト』、シカゴの『TV フォキャスト』といった各地で発行されていた番組案内誌を買収し、全国向けの記事や写真を集めて、1953年3月に創刊した。日本の『週刊 TV ガイド』のほか、フランスの『テレ・ポッシュ』など、この雑誌を下敷きに誕生した雑誌は多い¹⁴⁾。

『週刊 TV ガイド』は創刊後、しばらくは苦戦を強いられたが、1966（昭和41）年に関西版、1967（昭和42）年に中部版を創刊し。その後、各地区の異なる番組表に対応すべく地区版を次々と創刊していき、現在は17地区版を発行する全国誌に成長した。1974（昭和49）年に、共同通信社から『週刊 TV fan』が創刊されるまでは、テレビ情報誌としてはほぼ独走状態が続く。『週刊 TV fan』は版元を共同通信社から東京ポストに変更し、1976（昭和51）年に『週刊テレビ番組』¹⁵⁾と改題した。テレビ情報誌は長くこれら週刊誌2誌の状態が続いていくこととなる。1982（昭和57）年に角川書店より『週刊カドカワ ザテレビジョン』¹⁶⁾が創刊された。『ザテレビジョン』は印象的なサウンド・ロゴを使ったテレビCMを投入し、たちまち認知度を上げていった。総合出版社のテレビ情報誌参入により状況は一変し、その後、各社から次々と創刊されていくこととなる。

6. FM 情報誌の時代

番組表を掲載する雑誌としては、かつて FM 情報誌というカテゴリーも存在した。

FM ラジオは 1957（昭和 32）年に NHK-FM が実験放送を開始したもので、高音質なステレオ放送だったため、音楽中心の放送が多かった。東京では 1970（昭和 45）年 4 月に民放局であるエフエム東京が開局し、長く 2 局体制が続いた。1970 年代、高音質かつステレオで放送される FM の音楽をカセットテープに録音してコレクションする「FM エア・チェック」が若者を中心に大きなブームとなり、FM 放送の番組表と、放送する曲目まで掲載した FM 情報誌が人気を博した。入江（2020）は「現在で言えば「配信ダウンロードサービス」ともいえるシステム」¹⁷⁾としているが、FM 放送は、当時、若者には高価だったレコードに代わる、重要な音楽供給源であったといえる。

最初の FM 情報誌は、1966（昭和 41）年に共同通信社から創刊された『FM Fan』で、まだ NHK-FM 1 局の時代である¹⁸⁾。当時の FM の番組はクラシックが中心で、FM 情報誌もクラシック音楽の記事やオーディオに関する記事が多かった。1971（昭和 46）年に音楽之友社から『週刊 FM』、1974（昭和 49）年に小学館から『FM レコパル』、1981（昭和 56）年にダイヤモンド社から『FM STATION』が創刊され、一時期は 4 誌が鏝を削る状態であった¹⁹⁾。特に、後発だった『FM レコパル』と『FM STATION』はエア・チェックしたカセットテープに入れるレーベルを付けるなど、若者を意識した雑誌作りがなされていた。前述した 1982（昭和 57）年創刊の『ザテレビジョン』にもテレビ番組表とともに FM 番組表が掲載されていたが、これも若者を意識したテレビ情報誌という意味があったと思う。一世を風靡した FM エア・チェックであったが、レンタルレコード、レンタル CD の登場などによりエア・チェックの必要性が薄れたことや、FM 放送局の多局化によって、FM 放送が純粋な音楽番組というより、DJ（ディスク・ジョッキー）のトークを中心に展開するようなスタイル²⁰⁾に変わっていき、次第に FM はエア・チェックするものではなく、生活の中で BGM 的に聞き流すラジオ放送に変化していく。エア・チェック・ブームの終焉とともに、FM 情報誌も姿を消していき、現在は 1 誌も残っていない。

7. 新聞ラ・テ欄の発展～番組表配信会社の誕生

現在、全国紙のほとんどはテレビ欄を最終面においているが、当初は中面にあった。最終面への移動は読者の利便性を考えてのことであるが、テレビが生活の中で重要な位置を占めて来た 1970 年代、テレビ欄が見たくて新聞を取っているという層も一定数いたものと考えられる。いち早く最終面への移動に着手したのは読売新聞で、1970（昭和 45）年 6 月 2 日

付より、紙面を拡充し、テレビ欄の最終面掲載を実行した。読売に遅れること2年、朝日新聞も1972（昭和47）年8月1日付から最終面に移動させた。ところが、朝日新聞は1978（昭和53）年10月1日付より、番組表の文字を大きく見やすくしたテレビ・ラジオ面としてリニューアルし、見開き2ページにして再び中面に移動した。これが読者から不評を買い、1979（昭和54）年5月18日付より結局最終面に戻して現在に至っている。一度変更した紙面を、読者の要望によりもとに戻すという例はあまりないことであり、しかもそれがテレビ欄であるということで、新聞社としては苦渋の決断だったのではないだろうか²¹⁾。

新聞にとっては、テレビ欄は読者維持のためにもなくてはならないものとなったが、一方で番組欄制作は非常に手間のかかる作業であり、なんとか合理化したいということが課題であった。1971（昭和46）年10月、『週刊TVガイド』を発行する東京ニュース通信社に、日本新聞協会編集主幹・大森幸男より朝日・毎日・読売の3大新聞社にラジオ・テレビ欄を配信できないかという打診があった。東京ニュース通信社は、準備期間を経て、1973（昭和48）年9月1日、まず日本経済新聞社への配信を開始、同年11月1日に、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞へ番組表を配信し、その後全国へと広げていった²²⁾。このときから新聞のラ・テ欄は、配信会社からの配信を受けて制作するものとなり、新聞社が自ら制作しない紙面となっていった。長く、ラ・テ欄配信業務は東京ニュース通信社が一手に行ってきたが、1984（昭和59）年、日刊スポーツの関連会社である日刊編集センター（現・日刊スポーツPRESS）がラ・テ欄配信に参入した²³⁾。同社は日刊スポーツ、朝日新聞へのラ・テ欄配信業務を皮切りに、ブロック紙や地域紙、さらに一部雑誌にも配信を始めた。これにより、非常に手間のかかる作業であった番組表作りを自社でやらなくても、テレビ情報誌に参入できる環境が整ったということとなる。現在は、既存のテレビ情報誌でも、番組表部分を配信会社からの供給で制作している例がある。

8. テレビ情報誌にとって番組表とは

テレビ情報誌にとっての番組表は、その誕生当初こそアメリカ式の横書き流し込み型ではあったが、現在は新聞のそれと同様の表組スタイルで定着している。現在、14誌が発行されており、各誌番組のジャンルの色分けや、文字の大きさ等を工夫することで他誌との差別化を試みているが、番組表自体のスタイルとしてはそんなに差異はない。それでも、テレビ情報誌は、その根幹である番組表を少しでも見やすく使いやすくしようと試行錯誤してきた。一例として、創刊から58年の歴史を持つ『TVガイド』における、番組表（関東版）の変遷をまとめてみた（表10）。A5判のコンパクトサイズで創刊した同誌は、創刊当初こそアメリカ式の放送開始時刻順・横組み番組表であったが、1964（昭和39）年には新聞の番組表のような表組となる。しかし、A5判サイズゆえ、見開き2ページで1日分を掲載するこ

とは難しく、「あさ・ひる」と「よる」を分割して掲載していた。1986（昭和 61）年にはビデオ録画時代を反映して、2 色刷りとなり、当時録画することの多かった「映画」を赤字で表現した。1995（平成 7）年には、他のテレビ情報誌同様に判型を A4 変型とし大判化した。しかし番組表で他誌との差別化を考えた同誌は、大判化しても 1 日分を見開き 2 ページとせず、「あさ・ひる」2 ページ、「よる」2 ページと 1 日分を 2 見開きに分割し、番組表の中に解説記事を盛り込んだ「超番組表」をスタートさせた。その後も、BS デジタルの多チャンネル化をはじめとする、テレビを取り巻く環境の変化に対応し、その都度リニューアルを繰り返している。特に、2011（平成 23）年 7 月の地上デジタル化以降は、EPG²⁴⁾によりテレビ画面で簡単に番組表が見られるようになった。テレビ情報誌の弱点でもある、番組変更への対応では EPG にはかなわない。しかし一覧性が見やすさという点では紙媒体は優れているところもある。田原・入江・兼高・日比（2003）はテレビ情報誌についての座談会で「テレビ誌で情報を出すと、読んで初めて見る気になる人は相当数いるでしょう。」（日比）と語り、いかに見やすい番組表を提供できるかが、テレビ情報誌の使命といえるであろう。

9. 番組表のないテレビ情報誌への模索

デジタル時代のテレビ情報誌のあり方として、「番組表のないテレビ情報誌」への模索が各社で盛んに行われている。たとえば、日本雑誌協会発行『マガジンデータ 2020』の「テレビ情報誌」カテゴリーに掲載されている『TV Bros.』と『B.L.T.』は、それぞれ隔週刊および月刊のテレビ情報誌として創刊したが、いずれも番組表以外の記事に特化した雑誌となり、テレビ情報は載せているが番組表を掲載していない¹⁾²⁵⁾。また、各テレビ情報誌からは増刊、別冊、ムックという形で、グラビアに特化した雑誌も多数発行されている²⁶⁾。なかなか新雑誌を創刊しづらい昨今、この形はますます増えていくのではないだろうか。

テレビ番組表のないテレビ情報誌としては、古くは 1981（昭和 56）年に学習研究社から創刊された『TV SPECIAL（テレビ・スペシャル）』がある。「テレビを読む雑誌」というキャッチフレーズで、テレビをネタ元に男性ビジネス・マンを意識した誌面構成になっている。堺屋太一、竹内均、渡部昇一、佐木隆三、五木寛之らが寄稿する比較的硬派な内容であったが、わずか 2 号で廃刊となった。雑誌の切り口としては十分あり得ると思うが、やはりテレビ情報誌を購入する層は、こういった雑誌を求めていなかったということであろう。現在も、番組表のないテレビ情報誌として発行されているものはすべてアイドルのグラビアやインタビュー中心である。テレビ情報誌の世界では「テレビ＝芸能」という位置づけなのだろうか。

表 10 『TV ガイド』における番組表の変遷

号数	判型	番組表 (関東版) 内容 (ページ数は番組表 1 日分の分量を示す)	備考
1962 年 8 月 4 日号～	A5 判	・放送開始時刻順で横組み番組表 (アメリカの『TV GUIDE』スタイル)	番組表を巻末におき、表 4 にもロゴマークを入れて、後者からも開かせる工夫。
1964 年 9 月 11 日～	A5 判	・あさ・ひる (午前 6 時台～午後 5 時台) 2 ページ ・よる (午後 6 時台～11 時台) 2 ページ	表組で新聞のテレビ欄と同様のスタイル。
1969 年 4 月 4 日号～	A5 判	・あさ・ひる (午前 6 時台～午後 5 時台) 2 ページ ・よる① (午後 6 時台～8 時台) + 番組解説 2 ページ ・よる② (午後 9 時台～11 時台) + 番組解説 2 ページ	夜の時間帯を 2 分割してより詳しくした。
1982 年 8 月 6 日号～	A5 判	・あさ・ひる (午前 6 時台～午後 5 時台) 2 ページ ・よる (午後 6 時台～11 時台) 2 ページ ・UHF 番組表 (テレビ埼玉, 群馬テレビ, 千葉テレビ) 2 ページ ・番組解説 2 ページ	
1986 年 4 月 4 日号～	A5 判	・同体裁で 2 色刷り (映画 = 赤字)	キャッチフレーズ「1 週間のテレビ番組&ビデオ録りマガジン」(1986 年 8 月 15 日号～)
1995 年 11 月 1 日号～	A4 変型判	・あさ・ひる (午前 5 時台～午後 5 時台) 2 ページ ・よる・深夜 (午後 6 時台～深夜 4 時台) 2 ページ ・ローカル局番組表 + 番組解説 2 ページ	大判化し、番組表内に解説を挿入した「超番組表」誕生。4 色カラーページになる。
2003 年 10 月 17 日号～	A4 判	・1 日分を 1 局 100 行番組表 2 ページ ・ローカル局番組表 + 番組解説 1 ページ, BS デジタル番組表 1 ページ ・番組解説 2 ページ	キャッチフレーズ「日本一! 100 行満点番組表」
2012 年 8 月 3 日号～	A4 判	・地上波番組表 (1 局 81 行で大字化) 2 ページ ・BS デジタル番組表 2 ページ ・番組解説 2 ページ	
2014 年 1 月 17 日号～	A4 判	・地上波写真入り番組表 (66 行) + ローカル局 (37 行) 2 ページ ・BS 番組表 (66 行×7 局, 27 行×15 局) 2 ページ	キャッチフレーズ「美 (ヴィジュアル) 番組表」(写真入り番組表で実用新案登録)
2018 年 12 月 7 日号～	A4 ワイド判	・地上波 15 局番組表 (66 行) 2 ページ ・BS 番組表・BS4K&8K 対応! (66 行×8 局, 27 行×18 局) 2 ページ	キャッチフレーズ「新時代の TV ガイド始動!」BS4K&8K 対応 7 日間番組表

おわりに

かつて、新聞をテレビ番組表がほしいために購読していた層が一定数存在したであろうことは前述した。その後、テレビ情報誌が登場し、「新聞を毎日取るのは負担だが、テレビ番組表はほしい」という人たちが、新聞より安価で済むテレビ情報誌に飛びついた²⁷⁾。1980年代には、そういった若者をターゲットにしたテレビ情報誌も創刊している²⁸⁾。しかし、若者のテレビとの関わり方も大きく変化した。総務省による令和元年度（2019年度）平日の主なメディアの利用時間調査を見ると、20代はテレビのリアルタイム視聴時間69.0分であるのに対して、インターネットの利用時間は177.7分に及ぶ。休日ではテレビ視聴時間は87.4分と増えるが、インターネットの利用時間も223.2分と増えている²⁹⁾。また、株式会社アットホームが行った20代で一人暮らしの社会人を対象にした調査によると、テレビを持っている人は78.3%いるものの、テレビを最低限必要な電化製品と思っている人は59.4%にとどまっている³⁰⁾。今や若者にとって新聞やテレビは必ずしも必要なものではなく、どちらもスマホ1台あれば賄えるということなのかもしれない。

この先、テレビ番組表をはじめとする番組情報はどうなっていくのだろうか。アメリカではニューヨークタイムズ紙が、2020年8月31日付をもって、81年間続けて来たテレビ欄の掲載を休止した。同紙文化欄編集者ギルバート・クルズ氏は「ストリーミングの時代になり、番組表という形が視聴スタイルに合わなくなった」としている³¹⁾。確かに日本でも、テレビの見られ方はだいぶ変化してきている。同時に、テレビのコンテンツ自体も大きく変わった。30年ほど前までは、毎日どこかの局で映画を放送し、毎日どこかの局で歌番組を放送していた。次はどんな映画が放送されるのか、来週の歌番組にはだれが出演するのか、そんな知りたかった情報が載っているのがテレビ情報誌であった。テレビ番組自体が変化してきていることを考えると、近い将来「テレビ番組表のないテレビ情報誌」が一般化する日が来るのかもしれない。田原・入江・兼高・日比（2003）は「あくまでもテレビ番組あつての情報誌」としながら、テレビ情報誌の「テレビを見やすくする、親しみやすくする、身近にする、わかりやすくするという効果は大きい」（田原）と語っている。時代の変化を受けながらも、テレビ情報誌はテレビを楽しむ視聴者（読者）のために発行を続けている。

注

- 1) 日本雑誌協会発行『マガジンデータ 2020』の「テレビ情報誌」のカテゴリーには、番組表を掲載していない『B.L.T.』と『TV Bros.』（ともに東京ニュース通信社）も含まれている。『B.L.T.』は1997年9月に女性アイドルに特化した月刊テレビ情報誌として創刊したが、2015（平成27）年7月号より番組表掲載を休止し、「ビューティフルレディーのすべてがわかる新

テレビ情報誌の誕生と発展

型テレビ誌！」というキャッチフレーズで発行している。『TV Bros.』は1987年7月に隔週刊のテレビ情報誌として創刊したが、2018年3月に番組表の掲載を休止し「様々なカルチャーを独自の切り口で紹介する新型テレビ誌」としてリニューアルした。同誌は2020年4月号をもって定期誌としての発行を終了、web版に移行した。

- 2) 李 (2017) p. 140
- 3) 三矢, 重森 (1998) p. 25
- 4) 三矢, 重森 (1998) p. 25
- 5) 宮川 (2016) p. 77
- 6) 宮川 (2017) p. 97
- 7) ラジオの当時の表記は「ラヂオ」であった。
- 8) 『放送 80 年それはラジオからはじまった』(NHK サービスセンター, 2005 年) p. 19
- 9) 1959 年に NHK 教育テレビも放送を開始しているため、チャンネル数としては 6 チャンネルになる。
- 10) 東京読売新聞 1959 年 3 月 31 日付「社告」(p. 1)
- 11) 『放送文化』(1999 年 1 月号) には、「定着はしなかったが、『週刊テレビ時代』を含め 2 誌が発行された」(p. 20) との記述がある。また、李 (2018) にも「1950 年 5 月に創刊されていた NHK の広報誌『NHK』もテレビ番組表を扱うようになり、1954 年 4 月に創刊された『週刊テレビアン』(テレビアン社、のちは月刊に変わった) などテレビ専門誌も登場した」とある。『週刊テレビ時代』は旺文社創業 30 周年記念事業の一つとして創刊された雑誌で、創刊号の表紙は当時のテレビを賑わすスターやスポーツ選手の顔写真が 14 人掲載され、その名前を当てるのが創刊記念プレゼントクイズとなっていた。
- 12) 東京朝日新聞 1962 年 8 月 10 日付コラム「季節風」(p. 9)。
- 13) 『東京ニュース通信社六十年史』(2007) pp. 43-44
- 14) 金平 (1993) pp. 169-173
- 15) 1997 年に版元の解散により廃刊。
- 16) 創刊号は AB 判、定価 180 円、表紙はレモンをかじる薬師丸ひろ子。キャッチフレーズは「テレビと遊ぶ本」。『週刊カドカワ』というサブタイトルは創刊号から 1985 年 7 月 26 日号までついていた。
- 17) 入江 (2020) p. 25
- 18) 丸山 (2001) によれば、当時は新聞に番組表が掲載されておらず、「NHK の方から「番組表を載せた雑誌を創れないか」と打診があり、66 年 6 月に 1 万 5000 部で創刊されたという経緯」(p. 99) があるとのことだ。
- 19) FM 情報誌は『週刊 FM』を除き、すべて隔週刊誌であった。
- 20) DJ のトークが中心になるスタイルは、ある意味 FM 局の AM 局化と言える。音楽を聞かせるというよりも、生放送で生活情報等の合間に音楽を入れていくという形である。もうひとつは、1988 年に開局した J-WAVE (エフエムジャパン) の出現が大きい。バイリンガルの DJ を中心に、音楽の上にトークがかぶさるアメリカン・スタイルの放送は、これまでのエア・チェックのように音楽だけを録音することは困難になった。丸山 (2001) によれば、生放送が多くなったことにより、放送局が事前に番組表を出さなくなったということと、「オーディオ業界の不振が重なってしまい、広告収入が激減したこと」(p. 99) も大きかったとしている。

- 21) 1979年6月10日付の朝日新聞 (p.5)「読者と朝日新聞」欄に、テレビ欄が「中の面に入って非常に不便だ」という声が多数寄せられたことが紹介されている。「紙面変更の場合、長年の習慣から、その当座は読みにくくなったというご意見をいただくことはありますが、今回はそれが二カ月、三カ月と続きました。」と記されている。
- 22) 『東京ニュース通信社六十年史』(2007) pp.76-79
佐怒賀 (1983) は「伝聞によれば、それに先立つ四十六年秋ごろ、朝日・毎日・読売の三社が共同出資のラジオ・テレビ欄配信会社設立を計画したことがその契機となったものである。」(p.19) としており、そこから『週刊 TV ガイド』で番組表制作の実績がある東京ニュース通信社の打診へとつながった。
- 23) 『東京ニュース通信社六十年史』(2007) pp.191-194
- 24) Electronic Program Guide (電子番組表) で、番組表をテレビ画面等に表示するシステムである。
- 25) 『ザテレビジョン』も2019年10月11日号より、鹿児島・宮崎・大分版のみ番組表掲載を休止した。
- 26) TVガイドからは『TVガイド PERSON』『TVガイド plus』『TVガイド Alpha』『TVガイド dan』など、ザテレビジョンからは『ザテレビジョン Zoom!!』『ザテレビジョン COLORS』, TV LIFEからは『TV LIFE プレミアム』, 月刊TVnaviからは『TVnavi SMILE』, 月刊TVfanからは『TVfan CROSS』といったように、各テレビ情報誌から派生したグラビアやインタビューに特化した雑誌が発行されている。
- 27) テレビ情報誌に関する座談会において、「学生など新聞を取らない人が増えて、その人が新聞代わりに買っているのじゃないかな」(日比2003)という発言がある。
- 28) 『TVBros.』はまさにそういった層に向けて創刊された。メインは2週間分の番組表で、原則としてカラーページは広告のみ。若者の共感を呼ぶコラムを中心に構成した誌面内容で、創刊時の定価は150円であった。
- 29) 「令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書〈概要〉」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000708015.pdf (2020年11月7日閲覧)
- 30) <https://athome-inc.jp/wp-content/uploads/2020/06/2020062301.pdf> (2020年11月7日閲覧)
- 31) <https://www.nytimes.com/2020/08/28/insider/TV-listings-ending.html> (2020年9月4日閲覧)

参 考 文 献

- 入江たのし「FM放送の50年—FMがラジオに与えた影響とこれから」『民放』2020年9月号 (2020, 日本民間放送連盟) pp.24-27
- NHK サービスセンター『放送80年それはラジオから始まった』(2005, NHK サービスセンター)
- 金平誠之助『アメリカの雑誌1888~1993』(1993, 日本経済新聞社) pp.169-173
- 佐怒賀三夫「新聞ラジオ・テレビ欄の新しい役割」『総合ジャーナリズム研究』No.103 '83冬季号 (1983, 東京社) pp.18-23
- 田原隆, 入江たのし, 兼高聖雄, 日比俊久「「テレビ番組」あつての情報誌 それ以上でもそれ以下でもない!」(特集 乱立! テレビ情報誌の功罪)『GALAC』2003年7月号 (2003, 放送批評懇談会) pp.38-41

テレビ情報誌の誕生と発展

- TV ガイド特別編集『表紙で振り返る TV ガイド 50 年』（2012, 東京ニュース通信社）
- テレビ番組研究会『ラテ番組鑑』（1987, 書苑新社）
- 『テレビ 60 年 in TV ガイド』（2012, 東京ニュース通信社）
- 『東京ニュース通信社六十年史』（2007, 東京ニュース通信社）
- 日本雑誌協会『マガジンデータ 2020』（2019, 日本雑誌協会）pp. 64-65
- 服部孝章, 服部研究室「ラジオ・テレビ欄の研究—新聞の機能と役割—」『応用社会学研究』第 34 号（1992, 立教大学社会学部研究室）pp. 239-255
- 服部孝章「新聞ラ・テ欄の変遷と問題点」『民放』1993 年 6 月号（1993, 日本民間放送連盟）pp. 10-14
- 『別冊ザテレビジョン 20th Memorial Book テレビとレモンの 20 年』（2002, 角川書店）
- 『放送文化』1999 年 1 月号（1999, 日本放送出版協会）
- 丸山幸子「エアチェックとともに去りぬ」『日経ビジネス』2001 年 12 月 10 日号（2001, 日経 BP 社）pp. 99-102
- 三矢恵子, 重森万紀「新聞のテレビ欄はどう読まれているか〜「ラテ欄の利用に関する調査」から〜」『放送研究と調査』1998 年 7 月号（1998, NHK 出版）pp. 18-29
- 宮川大介「放送草創期の番組表を読み解く（1）〜何が記録されているか〜」『放送研究と調査』2016 年 11 月号（2016, NHK 出版）pp. 74-77
- 宮川大介「放送草創期の番組表を読み解く（2）〜番組表に見える時代の動き〜」『放送研究と調査』2017 年 1 月号（2017, NHK 出版）pp. 94-97
- メディア・リサーチ・センター『雑誌新聞総かたろぐ 2019 年版』（2019, メディア・リサーチ・センター）
- 『ラテ欄で見る昭和』（2019, マイウェイ出版）
- 李夢迪「テレビ情報誌研究の意義と可能性」『京都メディア史研究年報』第三号（2017, 京都大学大学院教育学研究科メディア文化論研究室）p. 140
- 李夢迪「『週刊 TV ガイド』分析からみる女性視聴行動の変容」『京都メディア史研究年報』第四号（2018, 京都大学大学院教育学研究科メディア文化論研究室）p. 35
- Glenn C. Altschuler & David I. Grossvogel (1992) *Changing Channels: America in TV Guide*, University Of Illinois Press